

私の憲法記念日

今でも、60年以上も前の、その日の感激を覚えているのは不思議なことです。

私が小学校5年生の時に、社会科の授業で「日本国憲法」を学びました。担任の先生が黒板に国の三本柱と言って、基本的人権、主権在民、平和主義、と言う言葉を並べて書いてくださり、憲法の説明をし、教えてくれたのです。それを学んだ時、非常に嬉しくなって、私はやっと日本人であることを誇らしく感じることができました。

それまでは私の生活は戦争の影がありました。空襲を逃れて、父を残して母子で疎開してきたこと、弟が死んだこと、父を慕っていた父の弟が22歳で戦死したこと、祖母が樺太に抑留されて、戦後2年たって無一文で帰ってきたこと等々、戦争のために家族が悲しみ、苦しんだことを身近に見てきました。

また、私の住む町は田舎町とはいえ、旧満州や大陸からの大勢の引揚者の方々がおられ、更生街という名前がついていましたが、一つの地区に、バラックのような粗末な小屋のようなものに住んでいました。その中に同級生がいました。彼が病気になって、欠席が続いたので、学級委員たちがお見舞いに行くということになりました。彼は「来ないでくれ、絶対来るな」と言っている。彼の友だちが言うのです。「遠慮しないでいいから」という思いで訪ねました。更生街の彼の寝ている場所を見て、本当に気の毒になり、彼の来るなと言う気持ちが痛いほど感じられたのです。私なんか問題じゃないと思うほど、引揚者の生活は悲惨でした。戦争の傷跡がありました。

それゆえ、日本は二度と戦争をしない国であるということが本当に信じられないほど、輝かしい、希望になりました。それと同時に、主権在民と言いながら、なぜ象徴として、国民とかけ離れたような天皇がいるんだ？ 戦争放棄といいながら、なぜ警察予備隊(現 自衛隊)ができたんだ？ という矛盾をも感じたものでした。

やがて、教職であったとき、英語の選択科目「英語講読」のテキストとして、文部省が発行したThe Constitution of Japan (日本国憲法)という解説書をテキストに使ったことがありました。最初、生徒たちは難解な単語を嫌がっていましたが、年度の終わりに、殆どすべての生徒たちが、これを学んでよかったと感想を言ってくれました。私が感じた矛盾を同様に感じていました。さらに、いまだに男女同権なんてないね～ 生活保護の人たちが多いね～ と残念がっておりました。

ごく最近、2007年頃でしょうか、「日本の青空」という映画の有料試写会で、はじめて鈴木安蔵という人物を知りました。彼を中心として、数名の憲法学者たちが日本国憲法の作成にかかわったことを知りました。

『この「憲法草案要綱」憲法研究会案は一九四五年十二月二十六日にGHQと日本政府に提出された。』とあります。

憲法草案を見ると、主権在民、法の下での平等、平和主義があります。素晴らしい草案です。原則はほぼ今の憲法と同じですけれども、戦争放棄までは踏み込んでいません。大日本帝国憲法とは全く違い、画期的な、民主的な憲法になっています。日本人として、誇りに思います。



鈴木安蔵 (1904—1983)

なぜ、政府は、これを無視し続けて、アメリカの押し付け憲法だ、改憲だ、さらに、武器輸出だ、集団的自衛権だ、と憲法をないがしろにするのでしょうか。幼い私の悲しんでいた心に、温かい希望の光を与えてくれた、憲法の三本柱を守っていきたくないと願っているのです。(2014年5月3日)